

「君を見てるとね、

なんか、エッチな事をしてあげたくなるんだよね……」

「おねえさん×ショタ」シリーズ

むちむちティ○アさんと金髪ショタくん



今日も私はこのコとエッチな事をする。

大の大人がこんな事をするのは間違っているとは思うけれど、
大好きなああの人の幼い頃に似ているこのコを前にして理性なんて保てない。

「ねえ？お姉ちゃんがこんなにご奉仕してあげてるのに今日はまだ大きくならないの？」

「ごめんなさい。あつ、あんまり強く握らないで・・・」

「えっ？いつも通り優しくにぎにぎしてるだけだよ？君が敏感なだけ」

「。。。あ」



「あつ、やっと大きくなってきた」

「あらっっっ。お姉ちゃんのヨダレが僕の口にいっぱい入ってきて苦しS。。。」

「そんな事言ってもやめてあげない、今日もたくさんペロチュウしながらエツチな事たくさんするの」

「。。。。」



「あ、やつと我慢汁出てきたりあといつもみたいに鼻息も荒くなってきた♪
うふふ♪ そろそろ田舎の「コトコト」コトコトするわ」

「え、あれまた出るの？ や、やだ・・・あれ出る時、僕おかしくなるんだもん・・・」

「だーめ♪ 今日でも「コトコト」コトコトするの♪
それに前、白いのが出るのは男のコだからしようがないって教えたよね？
なにも怖くないんだよ？」

このコに初射精させたのは私。あの時の底知れない優越感、征服感ときたら、何ものにも変え難い体験だった。

はあ、今思い出してもゾクゾクする♪

少し休憩した後、今度は口でたっぷりしゃぶってあげる♪
フェラをはじめた頃は

「そんな汚いところ舐めちゃだめだよっ！」

と顔を真っ赤にして怒っていたけれど、今はこの通り。

オチン○ンの先っぽが気持ちいいらしいので、

飴玉を舐めるように、口の中で転がしながらしゃぶってあげる♪

「先っぽだけチロチロ気持ちいいっ！」

ッ
コッ
コッ

「うふふ、君が本当にかわらねー」



この日はあれで終わらそうと思っていたけれど、私の性的衝動に歯止めが効かなくなっていた。
少し休憩させ、本日三度目のシヨタチ○ポいじり

「お姉ちゃん、今日はずっと君の精液飲みたい♪さつきみたいなおいしいのたくさん出して♪」

「お、お姉ちゃん、今日はなんかおかしいよ……」

「そんな事言ったって無駄♪君の顔にもっと僕のおちん○ん弄ってほしいって書いてあるよ♪」

「ん、そんなこと……」

はぁ♡

ニク

ニク

はぁ♡

さすがに三回目となると、私がエッチな顔でおちん○んを握っただけでギンギンに勃起させていた。

嫌がってる素振りを一応見せるけれど、その表情はどこか嬉しそうだった。

「ぐ、そんなに激しくしちゃ...」

「だって全然白いの出てこないんだもん。はやくお姉ちゃんの口にたくさん白いの出してよ」



ぐわ

ぐわ

ぐわ

ぐわ

「うふふ、見て見て、お姉ちゃんの口の中が君の濃くて熱いザーメンでいっぱい、
ゼーンぶ飲んであげるからね」

「お姉ちゃん、回の中だけじゃなくて……体中に白いのが……ごめんなさい……」

「あやまりなくていいんだよ、よく頑張ったね、えらいえらい」

私が精液まみれになった姿を見て興奮したのか、射精したばかりのおちん○んがまた勃起を始めていた。

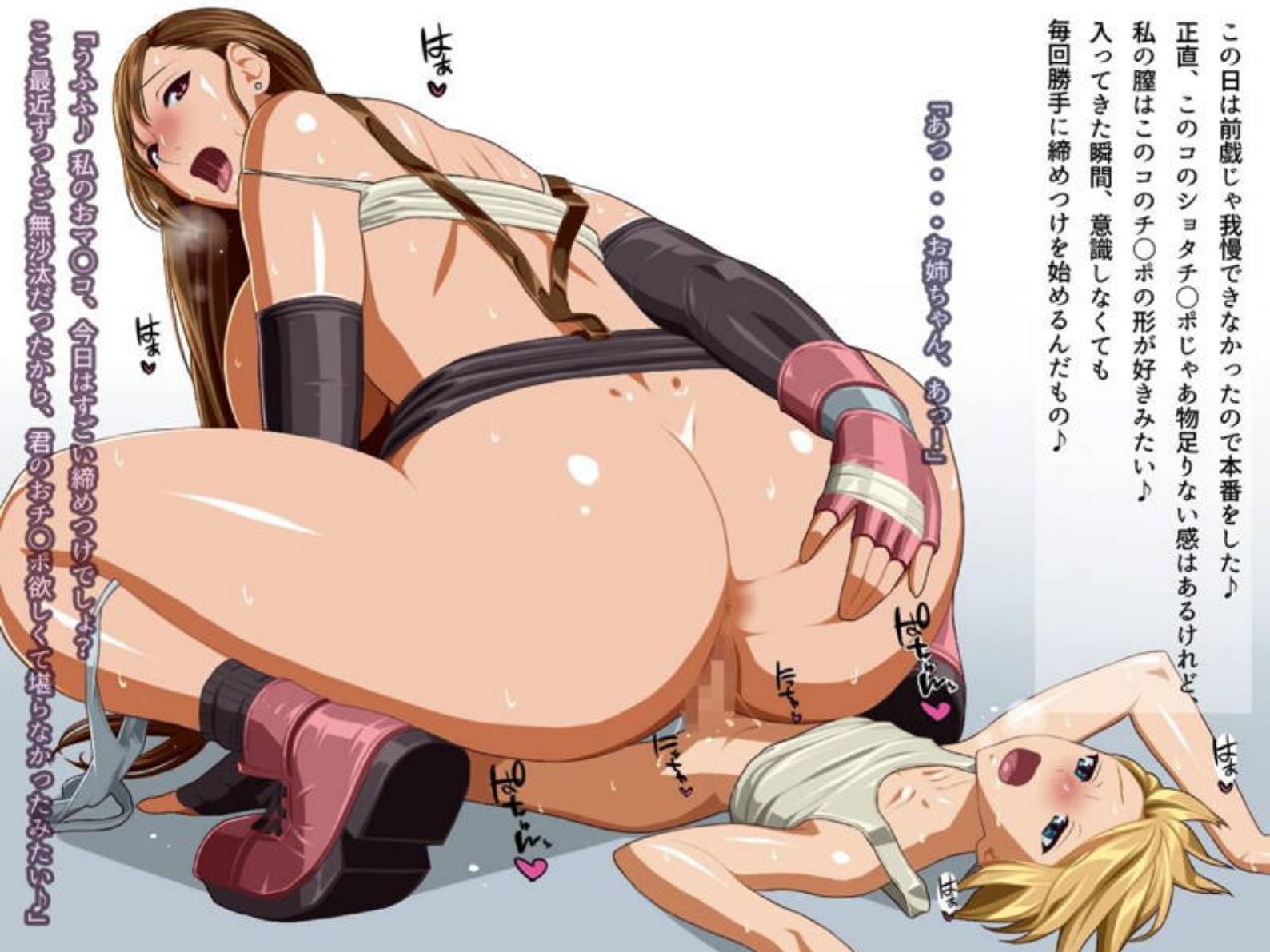
はぁ♡

はぁ…

はぁ♡

この日は前戯じゃ我慢できなかったので本番をした♪
正直、このコのシヨタチ○ポじゃあ物足りない感はあるけれど、
私の膣はこのコのチ○ポの形が好きみたい♪
入ってきた瞬間、意識しなくても
毎回勝手に締めつけを始めるんだもの♪

「あ……お姉ちゃん、あ……」



「……最近ずいぶん無沙汰だったから、君のおチ○ポ欲し〜い堪らな〜りな女だ〜」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

「あ……」

「あーん、出たのよーん」

「お、お姉ちゃん！」

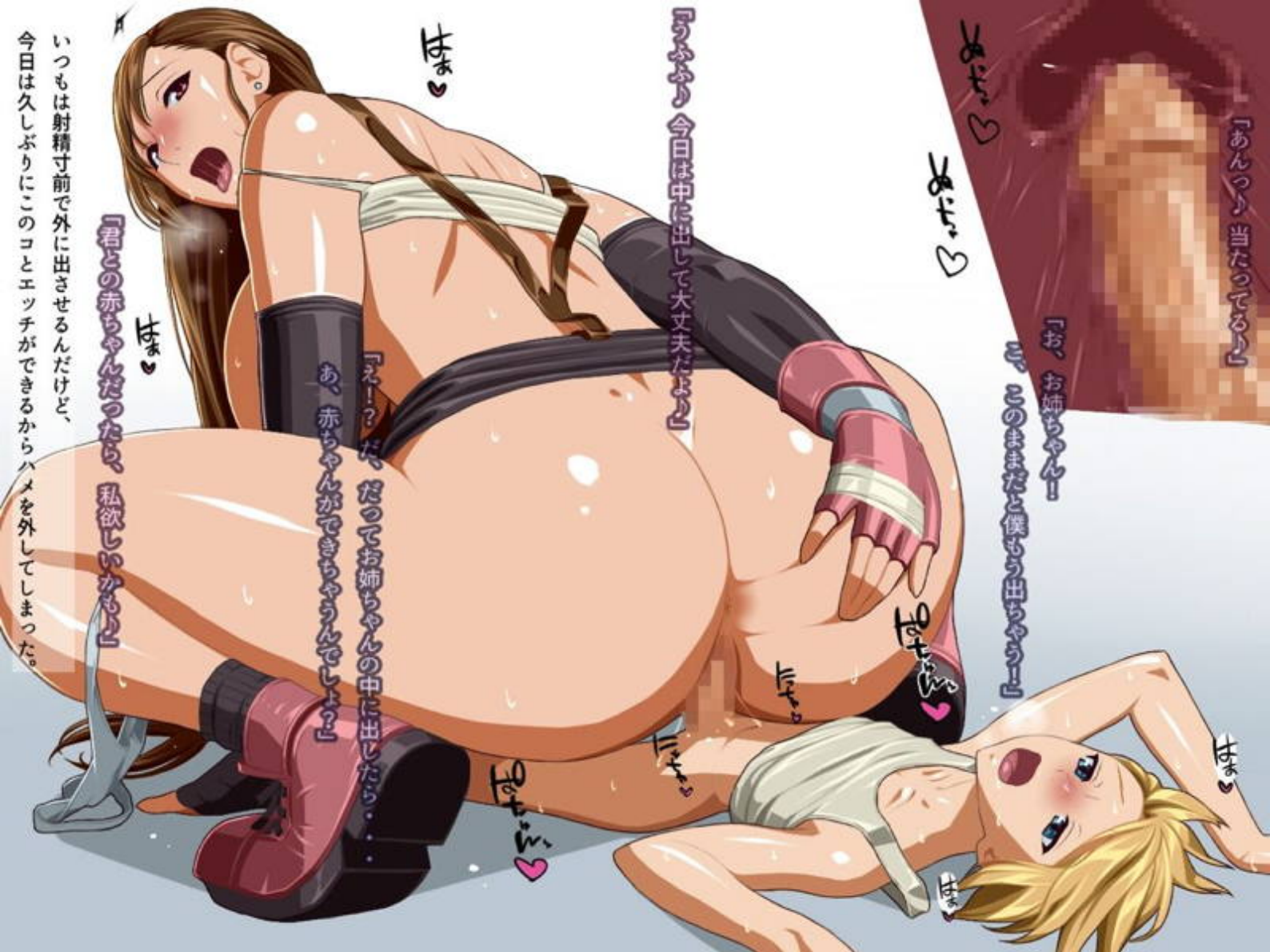
「う、このままだと僕もっ出ちゃうよーん」

「うふふ、今日は中に出して大丈夫だよ」

「えー？ だ、だってお姉ちゃんの中に出したい...
あ、赤ちゃんができちゃうんでしょ」

「君との赤ちゃんだったり、私欲しいかも」

いつもは射精寸前で外に出させるんだけど、
今日は久しぶりにこのコとエッチができるからハメを外してしまった。



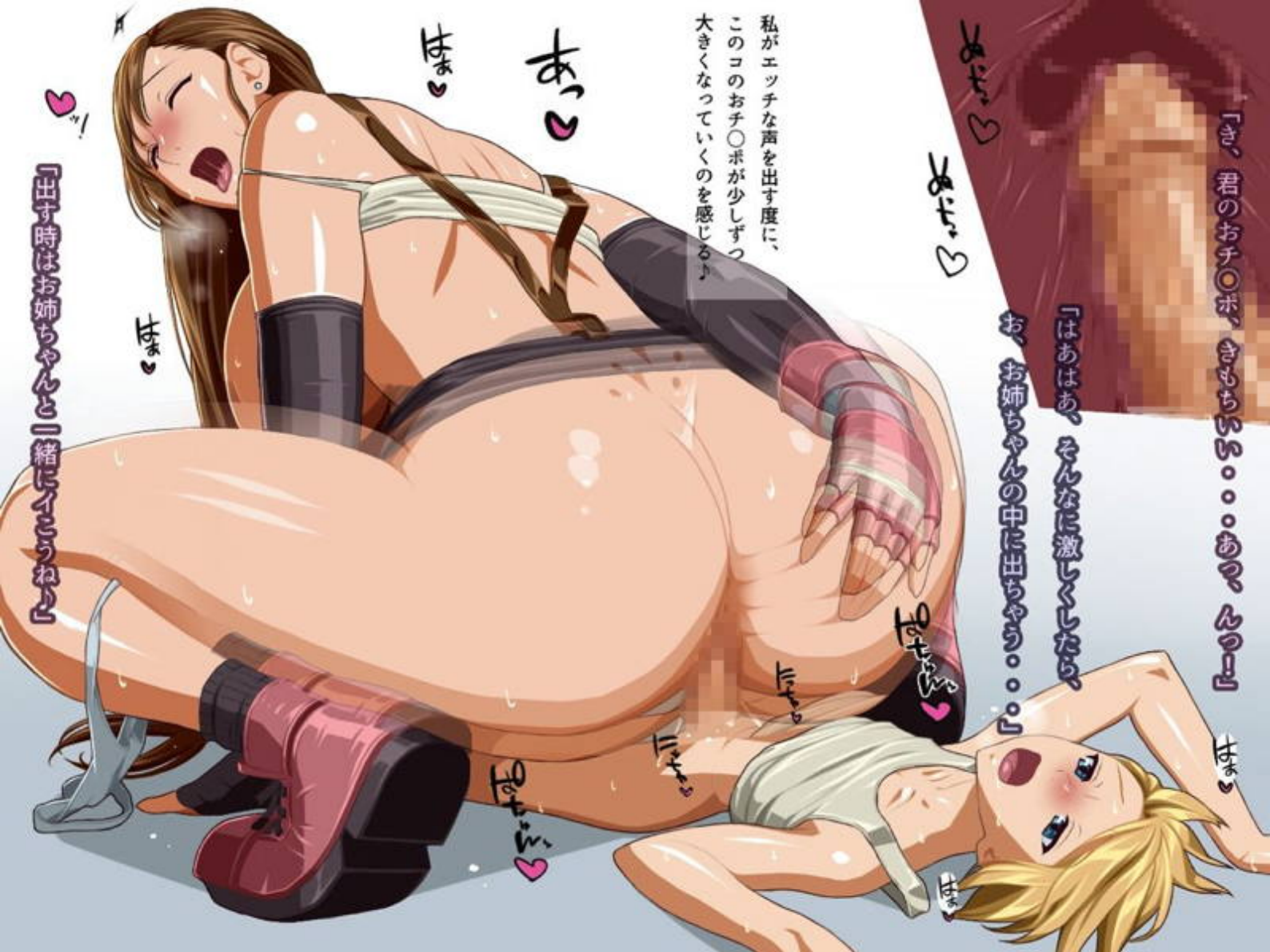
「き、君のおち○ポ、きもちSS。。。あ、200」

「はあはあ、そんなに激しいなら」

「お、お姉ちゃんの中に出ちゃう。。。」

私がエッチな声を出す度に、
このコのおち○ポが少しずつ
大きくなっていくのを感じるよ

「出す時はお姉ちゃんと一緒にいこうね」



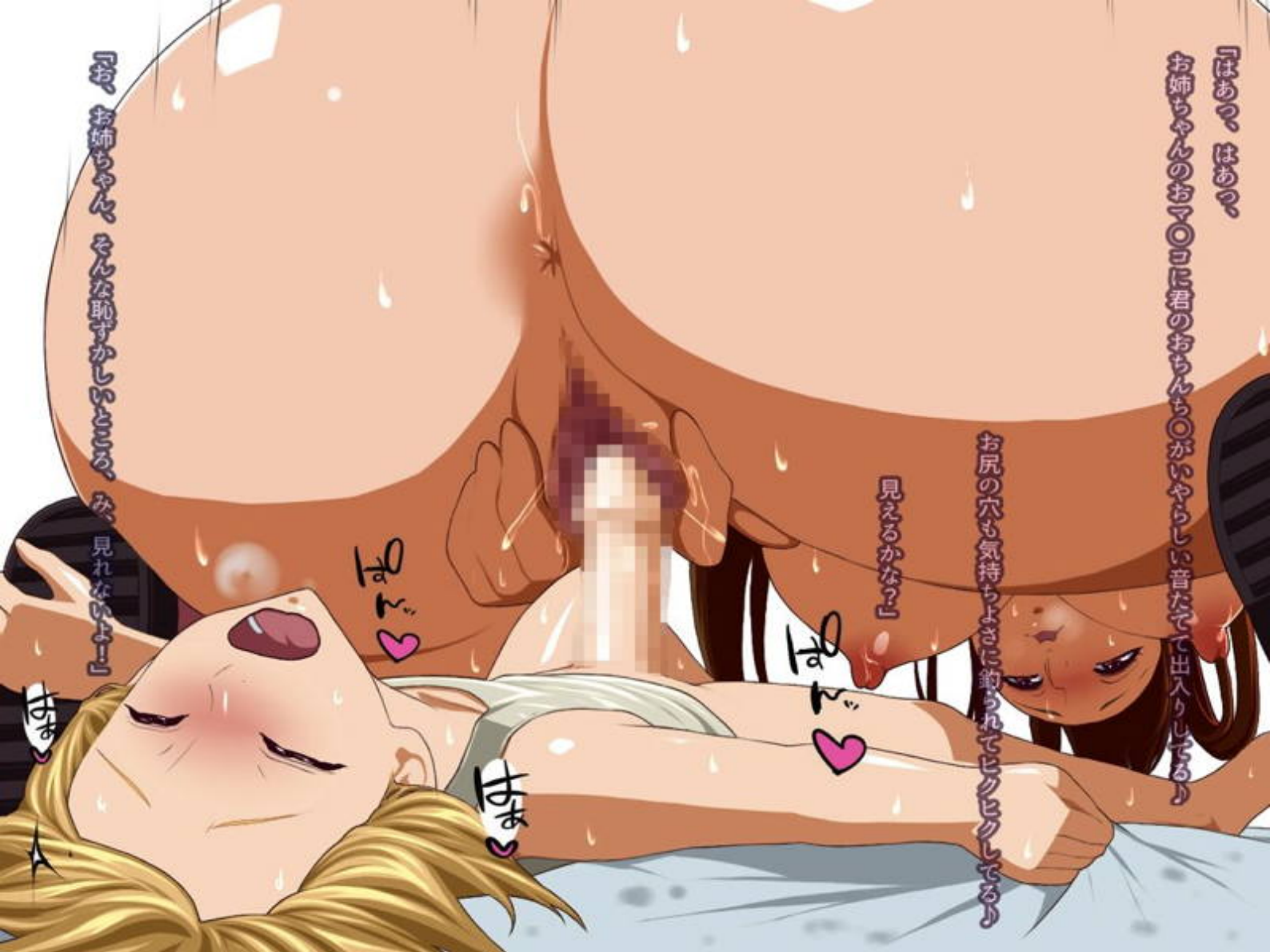
「はあっ、はあっ、」

お姉ちゃんのおマ○コに君のおちんち○がいやらしい音たてて出入りしてるっ

お尻の穴も気持ちよさに釣られてビクビクしてるっ

「見えるかな？」

「お、お姉ちゃん、そんな恥ずかしいところ、み、見れないよー！」





「あーもうーまた出ちゃうー」

「お姉ちゃんの大きなお尻にたくさん出して」

あーあんー

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

アハハ

このコのかわいい顔を見ながら気持ちよくなりたいたい私は体位を変えた。

「ねえ？ 見える？」

「お姉ちゃんのおマ○ロに君のおち○ち○んがいらしい音たてて出入りしてる」

「おへんっ！ お姉ちゃんのお締○りさすらいっ！」



「あつ、はつ、き、君のおちん○んの先っぽがお姉ちゃんの子宮の入り口に当たってるよ
分かる？」

「。。。うん。先っぽがお姉ちゃんの。。。
すっごく柔らかい感じに当たってる。。。」

「お姉ちゃんのおちん○んの先っぽがソックしてるんだよ、
君のおちん○んの先っぽがソックしてるんだよ、
お姉ちゃんの赤ちゃんの部屋を」

「あつ、あつ！また先っぽが当たったり気持ちいいん」





「はあっ！ あっ！ 君のおちんちの気持ちいい！ 気持ちいいよお！」

「お、お姉ちゃんの締め付けが……
僕もイきまじい……」

「イク時は一緒に顔見ながらイこうね」

「うん……あ……」

「はあっ」

「はあっ」

「はあっ」

「はあっ」

「はあっ」

この前のセックスが気持ちよかったのか、
今日はこのコから呼び出され、このコの家でエッチな事をたくさんする♪

「今日はいつもよりおちん○んギンギンだね♪
あつ、うふふ♪今、赤ちゃんの部屋に当たった♪」

はま♡

「・・・お姉ちゃん、今日は・・・なんだか・・・
そ、そのエッチな匂いがする・・・」

はま♡

「うふふ♪朝、トレーニングしてきたから、
その時掻いた汗の匂いかな？
・・・あつ、あんっーまた当たった♪」

はま♡

「・・・あはあはあ・・・
SSSSSS・・・はあはあ」

私の体の匂い、汗の中に混じっている発情した男の子にしか分からない
とってもエッチなフェロモンの匂いを嗅いで、
このコのおちんち○がいつも以上に大きくギンギンになっている♪



あははは

「お姉ちゃんのおはら...先のほが柔らかくておはら...」

「おはら...おはら...おはら...」

あは

「お姉ちゃんの乳首、僕が舐める度に膨らんでってる...えっちなだ」

あは

「お姉ちゃんのおはら...好き」

「おはら...おはら...おはら...」

あは

「...おはら...」

「おはら...君のおはら...」

あは

あは



「はあっ！ あっ！ あんっ！」

「君のおちんちんが気持ちSS-O奥に当たるの気持ちSS-O」

「はあはあっ、お、お姉ちゃんの奥の柔らかいとこに僕の先っぽが当たる度に
お姉ちゃんの「ん」がきゅってなる……」
「……由良ちゃん……」

「ま、また「一緒にいこうね」」

Shinji Shinji

Shinji Shinji

おほっ

おほっ



「あーあーあー」

「あーあーはあー」

お姉ちゃんの赤ちゃんの部屋にいらっは出して

君の濃サザーONPES OMSUJYU

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ

アハハハ



私のエッチな体を覚えてしまったこのコは、私とセックスをしたいがために昼夜問わずお店に来るようになってしまった。今日はこれで3回目。

「。。。お姉ちゃん、めんなさ。。。」

「しょうがないなあ、はやく出すんだよ？」

「お店に戻らないといけなから。。。」

あつ、んー」

あつ、んー」

「。。。うん、でも二回出すだけじゃ足りないかも。。。
なんかね、この頃お姉ちゃんの事考えるだけでおちんち○がどんどん大きくなって苦しいんだ。
自分じゃどうしようもないんだ。
しかも今までは二回出すだけでおちんち○が小さくなっていったんだけど。。。
もうそれだけじゃダメみたい。。。」

「うふふ、お姉ちゃんがめちゃくちゃになるまでしないと気が済まない？」

「。。。ん。」



「はあっ、すっぴーあっー奥まで当たってるー」

「はあはあ、お姉ちゃんのアソコ気持ちいい。。。あつたかくて、ぬるぬるしてて。。。」

「お、お姉ちゃん今日はもう二回目だから少し疲れてきたみたい。。。」

「君の気持ちは分かるけど優しくしてね。。。あんっ」

「あっ」

「いめんさい。。。頭では分かってるんだけど、お姉ちゃんの体エッチで気持ちいいから腰が勝手に動いちゃう。。。」

さすがに本日3回目となると、正気を保つただけで精一杯だった。だって何回も子宮の入り口の一番気持ちいい所を的確に突いてくるし、私の膣はこのコのおちんち○が大好きだから私の意志とは関係なく締め付けを始めるんだもの。



「お姉ちゃんのその顔好き。」

「お店にいる時は綺麗でかっこいいお姉ちゃんが、今は僕のおちんち○で気持ちよくなって泣きそうになっているんだもん。」

「ねえお姉ちゃん、僕お姉ちゃんを喜ばせるためにたくさん勉強したんだ。」

「気持ちよくなっねえwww」

私は子宮を突かれるたびに体中に走る快感のせいで、このコの問いかけに相槌を打つことしかできなくなっていた。





「お姉ちゃん出すね!」

ピクピク

ピクピク

ピクピク

ピクピク

お姉ちゃんのお尻を舐めよう!

ピクピク

ピクピク